

「荒口小学校と耕讀堂碑」

平成 28 年 12 月 18 日 (日)
城南公民館第 2 会議室
内 田 憲 治

1 明治新政府により「学制」が發布される

(1) 幕末から明治維新初期の動向

慶応 4 年 (1,868) 3 月 13 日、勝海舟は西郷隆盛と会談し江戸城の無血開城を決定する。
ここに至る以前、薩摩の島津^{なりあきら}斉彬の養女・^{すみこ}敬子（篤姫、天璋院）が 13 代将軍家定に嫁いでおり、江戸へ押し寄せる倒幕軍参謀の西郷隆盛に徳川家の存続の手紙を出していた。また、14 代将軍家茂に嫁いだ仁孝天皇の皇女和宮は、朝廷に対し江戸や徳川家を守るよう再三訴えていた。この陰の働きもあり江戸は火の海にならず江戸城は無血で開城に至った。

慶応 4 年 (1868) 3 月 27 日、太政官により「神仏判然令」が布告された。これにより 1,100 年余り続いた神仏習合を廃し、神道を国家宗教に据え「神社にある仏教施設などすべて排除せよ」、とのことであった。このことがやがて廃仏毀釈運動となり、拡大解釈される中で暴徒化した民衆によって多くの仏教施設や仏像などの文化財が失われた。

慶応 4 年 5 月 15 日、政府軍は上野で総攻撃を行い彰義隊（旧幕臣）は壊滅した。

慶応 4 年 (1868) 9 月 8 日が、明治元年 (1868) 9 月 8 日となる

明治 2 年 (1869) 5 月 11 日、函館の五稜郭に立てこもった榎本武揚^{たけあき}ら旧幕府軍と政府軍との間で行われた函館戦争は、18 日に政府軍が勝利し幕府軍はここにすべて消滅した。

明治 3 年 (1870) 9 月 19 日、太政官布告により「平民苗字許可令」が出され苗字の使用することが許された。

明治 4 年 (1871) 4 月 14 日、廃藩置県が行われた。その狙いは中央集権体制を確立するとともに、平民から税を取り直接国へ納め、国家財政の安定化を諮ることにあった。

明治 4 年 8 月 9 日、散髪脱刀令が公布された。男子は髷を落とし、刀（元武士の場合）を帯びなくても良いとした。

明治 5 年 (1872) 2 月 1 日、太政官布告により「戸籍法」發布され、すべての人は戸籍届けが義務付けられたが、租税・徴兵などに疑問を持ち届け出る人はいなかったという。

明治 6 年 (1873) 2 月 7 日、仇討が禁止された。江戸時代に於いても私闘は禁止されていたが、敵討ちは封建的道德と武士道的観念から、許可を得て奨励されており世間からも美談として称賛されていた。

明治 8 年 (1875)、苗字の届け出をしない人が多いので「苗字必称令」を出す。

明治9年（1876）3月28日、廃刀令が公布された。軍人及び警官や大礼服着用者以外の帯刀を禁止した。

（2）地域最初の荒口小学校が開校

我が国では江戸時代から寺子屋による教育が行われており、驚くべきは全国に16,500カ所もあり、読み書きが出来る人は約65%、ヨーロッパ人の20%を遥かに凌ぐ驚異的な識字率であった。それは徳川幕府の時代、およそ250年間は戦争がなく平穏な世が続き、それが世界最高水準の識字率になった。ちなみに現在の小学校は19,943校である。

明治5年（1872）8月2日、太政官より学事奨励に関する布告がなされ、翌3日に「学制」が頒布された。そして、8月に公布された「学制序文」の中には「今より以後は一般の人民（華族、士農工商および婦女子）は、必ず不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」と記されていた。「学制」の方針に沿って充実した内容で実現するために「学区制」の設定が必要であった。全国を八大学区に分け、その中を中学区、さらに小学区に分け、教育を行うというものであった。群馬県は第一大区で、中区は群馬郡・勢多郡・佐位郡・那波郡でこの中に人口数を鑑みて小区が設定された。

明治6年（1873）荒口の観音寺を仮校舎として小学校が開設され、10月に開校式が行われた。区域は荒子、下大屋、西大室、東大室、飯土井、新井、二之宮、今井、荒口、富田、泉沢、江木、堤、東上野の14カ村である。教員は阿部桂太郎（霞堂画伯の父）、阿部初太（耕雲の嗣子）があたった。開校式の際は学区取締りからは次のような訓示があった。

- ◎ 午前九時始業、午後三時解散の事
- ◎ 授業中はみだりに外出するを許さず
- ◎ 1時間ごとに休憩ある故、其の時大小便ある事
- ◎ 弁当は麦飯を持参する事

学区取締役は、水沼村星野耕策、八大区長市之関村小池文七郎、四小区長阿部章作および各村から戸長が開校式典に参列した。開校当初は生徒数50人位であった。1教室32人位で、生徒は登校の際に授業料として名札掛けの釘に文久銭1枚を毎日掛けておくことであった。その後、生徒の増加に伴い富田の橋本源次平、橋本清一郎、下大屋の鯉登真道が教員に就いた。

（3）学校制度は相次ぎ改変される

明治7年12月に慈照院を仮校舎として二之宮小学校が開設され、二之宮と今井の生徒が通学した。明治8年3月に最善寺を仮校舎として大室小学校が開設され、東大室と西大室の生徒が通学した。明治10年1月に飯土井と新井の二村は二之宮小学校へ通学変更になった。明治12年に正法院を仮校舎とし登美田小学校が新設され、富田、江木、堤、東上野の四村学区となる。明治13年、荒子に間口十間、奥行三間、二階建て新校舎を建設

し荒子小学校（荒子、下大屋、泉沢、富田）が開設され荒口小学校は廃校となった。

「学制」は下等小学・上等小学の各 4 年制であったが明治 12 年に廃止された。明治 14 年には「学校教則」が変更され、小学初等科・小学中等科・小学高等科の三科に分けられ、初等および中等は各 3 カ年、高等科は 2 カ年と定められた。

明治 19 年には「小学校令」が發布になり、尋常科と高等科の各 4 カ年になり尋常科は義務教育となる。明治 22 年に「市町村制」が公布され、翌年町村の単位で学区が整理された。26 年頃の授業料は、1・2 年生は 8 銭、3・4 年生は 10 銭、高等 1・2 年生は 15 銭、高等 3・4 年生は 20 銭が課せられていた。

明治 41 年に「小学校令」の改正により、尋常小学校は 6 年制になり授業料は廃止され、高等科のみ課せられることになった。目まぐるしい変遷をたどった教育制度もようやく整理され現在の学校の原型が形作られた。

2 何故、荒口に最初の学校が開設されたのか

（1）明治維新時に観音寺は無住だった

明治 8 年（1875）6 月 5 日太政官により、郡村ごとに「こうこく ち し へんしゅうれいそく皇国地誌編輯例則（郡村誌）」を内務省地理局へ提出するよう全国に通達が発せられた。荒口村の「寺」の項に「観音寺 東西二十二間（約 39.6m）、南北十六間三尺（約 29.7m）改正反別 壹反壹畝八歩（約 1,117.85 m²）真言宗同郡河原浜村中本寺玉蔵院末新義派ナリ 但中四十九戸 村ノ中央ニアリ 開基創立不詳 当分無住」と記されている。

観音寺は幕末頃に無住になり、その後明治政府の「神仏判然令」の影響で仏教が弾圧されていた時期でもあり、新たな住職が着任出来ない状況にあったことが推察される。地域が余り偏^{かたよ}らずたまたま無住の寺があり、その本堂は格好の教室としてここが学校として定められたものと推察される。そして「学校」の項に「官立荒口小学校一ヶ処 當村中央ニアリ 寺院借家凡生徒百三十一人 内男百廿五人 女六人」との記述がある。女性の就学は極めて少なく、この時代はまだ女性を学ばせるということが社会的に容認されていなかったようである。

（2）阿部耕雲が育んだ文教的な環境

観音寺の北西 100 歩足らずの所に私塾「耕読堂」があり多くの若者が学んでいた。入門する者すこぶる多く耕雲を敬慕し近郷近在はもとより、数十里の遠隔地からも学ぶため通う人がいた。明治 6 年（1873）、荒口の観音寺に小学校が開校すると、耕読堂で学んだ阿部桂太郎（霞堂画伯の父）、阿部初太（耕雲の嗣子）、下大屋の鯉登真道が教員として携わった。耕読堂の存在はこの地域の文教的な環境を育み、さらに隣接する観音寺は当時無住になっており、この二つの好条件が荒口小学校開校の要因となったのであろう。

3 阿部耕雲とその師

(1) 阿部耕雲（耕太郎）

耕雲は文化 11 年（1814）荒口に生まれ通称耕太郎といった。耕雲の母・まさは婿取りで、伊勢崎安堀町の阿久津家から福明^{とみあき}が婿に入った。後に福明は養父名の善兵衛を名乗り善兵衛福明^{むらおき}といい村長を務めた。岡永^{おこながし}松陽^{しょうよう}が揮毫した北原沼の改修碑文にそのことが刻銘されている。耕雲の妻・登以^{と い}は伊勢崎上之宮村の須田家より嫁いだ。

幼少より学問を好み天下の大学者になろうと志し若干にして江戸へ出て、久留米藩の侍講岡永^{じこう}松陽^{しょうよう}の門に入り専^{もっぱ}ら漢籍を修め、後に藤森天山^{わしづきどう}、鷺津穀堂^{しょうへい}に漢詩の指導を受けた。文久元年（1861）さらに林大学頭の門（幕府の学問所・昌平^{しょうへいこう}黌）に学び、学識はさらに深厚を増した。

帰郷後、文久 2 年（1862）に私塾「耕読堂」を開いた。慶応 2 年（1866）には、伊勢崎藩士中沢三郎が村の子弟のため今村に『祇敬堂^{ぎ けい どう}』を開設し、耕雲は講師として招^{しょう}聘^{へい}され、その際数百冊の書籍を贈った。明治元年（1868）、岩鼻県巡察使を命ぜられ学業勉励により褒章を賜った。明治 2 年、足利文庫・金沢文庫の荒廃を憂い、再興の資金を得るため政府の許可を得て印旛沼を干拓することを計画し、また窮民の自活の道に供するために測量を終えたが、志届かず夢破れ莫大な資金を使い果たしてしまった。明治 5 年（1872）には 10 年間行われた私塾「耕読堂」は閉塾した。明治 9 年（1876）に東京氷川町、仲猿楽町の浄土真宗教務院の漢籍教授^{しょうへい}に招^{しょう}聘^{へい}された。翌 10 年 3 月下谷練堀町に私塾『広済学舎』を開設し、11 年 2 月に帰郷したが病に侵され 4 月 26 日没す。享年 65 の生涯であった。

(2) 岡永松陽

松陽は寛政 10 年（1798）九州福岡県久留米に生まれた。筑後国久留米領主有馬頼永^{よりとう}の侍講^{じこう}とし江戸屋敷に務めていた。しかし、領主没後に領内は後継問題で抗争が勃発し嫌気がさした松陽は嘉永元年（1848）久留米領の侍講を辞した。その後、関東遍歴の気ままな旅に出ては教え子の阿部家の食客となり、また旅に出てはふらっと帰ることが続いたが阿部家は松陽を温かく迎えた。

明治 2 年 5 月いつものように耕雲宅へ帰ったが、間もなく病に冒され 6 月 3 日逝去し、阿部家によって手厚く葬られた。享年 72 であった。松陽と耕雲との交わりはおおよそ 30 有余年、耕雲宅を我家のごとく気ままに訪ね、家人もまたそれに応じ気持ちよく迎えていたようである。松陽は観音寺へ埋葬されたが住職が無住で、明治 42 年に宗派を同じくする真言宗の二之宮の無量寿寺に合併し廃寺になった。そのため後に松陽の墓も無量寿寺へ改葬された。松陽は荒口の『北原沼碑』や『小塚原碑』、荒子の『荒子塘碑』の撰文をして

いる。松陽は君贊、蘭州、世襄、実甫を号としていた。

（3）藤森天山

天山は名を恭助といい寛政 11 年（1799）江戸に生まれた。儒学者で書家であったが反井伊派の攘夷派とみなされ安政の大獄に連座し、安政 6 年（1859）江戸追放となり下総国（千葉県）行徳で過ごした。地域で学問交流などもあり明治維新後は、東京の小学校をへて行徳小学校で教鞭をとった。名は大雅、号を天山、弘庵などと称した。

（4）鷺津毅堂

毅堂は名を貞助といい文政 8 年（1825）尾張国（愛知県）一宮に生まれた。江戸の『昌平黌』や漢学塾『有隣舎』で学び、領主徳川慶勝の信頼を得て、維新後は尾張領から明治政府に入った。文部省や司法省の役人として、新しい日本の国づくりに尽力した。毅堂は軽々に人との交流はせず、入門しようと教えを受けに来た者であっても、その人物を見定めた後でなければ弟子たることを許さなかったという厳しさを持った人物であった。

（5）林 昇（學齋、大學守）

學齋は名を昇といい天保 4 年（1833）徳川幕府の儒宗林羅山の 12 世として生まれ、幕府の学問所・昌平黌の総教（塾頭）となり安政 6 年（1859）大學頭を世襲し従五位下に叙される。文久 3 年（1863）将軍家茂の入朝に随行する。皇女和宮の降嫁による条件の返答をするため家茂は 3 代家光以来、実に 200 年ぶりに上洛した。その際、大學頭は將軍のブレーンとして随行した。明治維新後に寺社奉行を命ぜられ、明治 7 年（1874）司法省明法権大属に任じられた。明治 10 年（1877）群馬県師範学校の教師、14 年（1881）に群馬県女学校校長を務めた。明治 21 年（1888）日光東照宮主典となり、後に禰宜を務めた。明治 33 年（1900）病により職を辞し、旧領武州大里郡大幡村柿沼の里で余生を過ごし、39 年（1906）7 月 14 日卒去す。享年 74 であった。學齋と号した。

明治 10 年（1877）師範学校の教師として群馬に赴任した時、耕雲の弟子たちは師の業績を讃えるため碑文を書いて戴くため息子初太が學齋を訪ねた。そして、「耕読堂之碑」は耕雲が帰郷した 11 年 2 月に建立された。なお、林學齋の父復齋はペリーの来航時に幕府の折衝役で対応し、鎖国状態での現状維持は困難とし米国船に対し、来航時は薪・水・食料は給与を行うこととした。ただし、通商条約の要求は断固拒絶した。翌年、ペリーが再来日した際にも林復齋は下田へ派遣され交渉役となった。この時における交渉の条約正文は日本語・英語・オランダ語で行われた。「下田追加条約」が締結し復齋は大任を果たした。

4 「耕読堂之碑」の碑文から幕末の歴史を探る

畊讀堂之碑

書き下し「曩の年耕雲翁黒田周甫を价して我が門に入る。周甫余に語りて曰く、翁小きより學に志し、耕耨之餘に里中の子弟を教育して年有り。門下の一人を擇びて焉に監督せしめんことを請う。時に大將軍將に京に朝せんとす。余は扈從の中に在り。行李惚忙として其の請を聴くに暇あらず。事は今を距たること已に十數年なり。頃ごろ翁の息初太來り見みえ、語るに前事に及ぶ。且つ曰く、翁平生自ら用いること儉にして、書を購うに儉ならず。積年の久しきにして遂に充棟を致す。今茲に翁の齡耳順を踰ゆ。子弟相謀り石を建てて以て其の事を紀るすに、大筆を煩わし、以て不朽に傳えんと願う、と。余曰く古自り富者未だ必ずしも書を購わず。購う者未だ必ずしも讀まず。焉を讀むも亦た未だ必ずしも人に教えず。而るに翁は能く此の數者を兼ね。蓋し翁の意謂えらく満贏の遺金も一經を遺して仰事俯育の道を知らしむるに如かず、と。是を以て華門圭寶、淡然と自得し、世利の何物為るか知らず。而して藏書の富なること五車を譲らず。是れ固より尋常の學者の夢見する所に非ざる也。即ち貽厥の謀遠くして後學に嘉惠すること意厚きを知る。其の國家の風教に裨益有ること豈に鮮尠たらんや。余其の篤志を嘉し且つ其の子孫たる者以て似ぎ以て續ぎ翁の志を忘れること無から使めんことを欲する也。翁は上野國勢多郡荒口の人 通稱耕太郎 阿部氏 耕雲は其の號也。明治十一年歳在戊寅二月 學齋林昇撰文 竹宇金田誠書」

曩年耕雲翁价黒田周甫入我門周甫語余曰翁自少志于學耕耨之餘教育里中子弟有年矣請擇門下一人監督焉時大將軍將朝於京余在扈從中行李惚忙不暇聽其請矣事距今已十數年頃翁息初太來見語及前事且曰翁平生儉于自用而不儉于講書積年之久遂致充棟今茲翁齡踰耳順子弟相謀建石以紀其事願煩大筆以傳于不朽余曰自古富者未必講書講者未必讀讀焉亦未必教人而翁能兼此數者蓋翁意謂満贏遺金不如遺一經使其知仰事俯育之道是以華門圭寶淡然自得不知世利之為何物而藏書之富不讓于五車是固非尋常學者所夢見也則知貽厥之謀遠而嘉惠于後學之意厚矣其有裨益于國家風教豈鮮尠乎余嘉其篤志且欲使為其子孫者以似以續無忘翁之志也翁上野國勢多郡荒口村人通稱耕太郎阿部氏耕雲其號也明治十一年歳在戊寅二月 竹宇金田誠書

學齋林昇撰文

竹宇金田誠書



〔訳〕「先年、耕雲翁は黒田周甫しゅうほうを介かいして我が門（幕府学問所昌平しやうへい）に入った。周甫は余（林昇）に語った、「翁は幼少より学問を志し、

農業の合間に数年村の子弟を教育している。昌平學門下より一人を選んで耕読堂の指導して頂きたい」と。しかし時はまさに征夷大將軍

（十四代家茂）が京へ登らんとし、余（林昇）はその随行により多忙でその願いを聞く暇がなく十数年を経た。先日、翁の息子初太が来

て昔話を語った。「翁は平生の生活は儉約し、書籍を買うときは儉約せず、その為家の中は書籍で一杯になった。今は翁も六十歳を過ぎ

た。そこで子弟達が相談し石碑を建てて翁の業績を記したので大筆（林昇）のお骨折りを頂いて、翁の業績を後世へ伝わるようにした
い」と。余（學齋林昇）は言った、「昔から金持ちの人必ずしも書籍を買わず、書籍を買う人必ずしも読まず、また書籍を読んでも必ず
しも人に教えず。しかし、翁は書籍を買い、読み、人に教える。恐らく翁の考えは、巨万の富を遺すより一冊の書物を残し、父母に仕え
妻子を養う人の道を知らせることの方が重要であると考えていると思う」と。この教えは貧しくともそんなことは気にせず自分の生き方
を悟れば私欲に惑わされることもなくなる。このように蔵書から得られる財産は計り知れない程である。このような道理は元来、一般の

学問を志す者にとつては思いも及ばないことである。つまり、
翁は子孫に残す財産をつくるための謀りごとなどは全く考
えず、後進の学者にとつて善きものを残そうとする気持ち
篤いことが分かる。それが国家の教育に役立つことが少ない
などと言える訳がない。余は、その翁の篤志とくしを理解し、また
子孫は翁の志に相応し代々引き継いで、忘れることのないよ
うにして欲しい。翁は、上野国勢多郡荒口の人 通称耕太郎
阿部氏 耕雲はその号なり。

明治十一年歳在 戊寅二月

學齋 林昇 撰文
竹宇 金田誠書

嘉永6年(1853)6月3日、横須賀の浦賀沖へアメリカ海軍東インド艦隊司令長官マシュー・ペリー率いる4隻の軍艦が来航した。湾内で大砲を数十発の空砲を発射したので江戸は大混乱となった。その時、12代将軍徳川家慶^{いえよし}は病に伏せており、老中首座の阿部正弘は経験のない事態に、広く大名から意見を求める「合議制」的な協議を行った。その結果、幕府の権威は著しく低下することになった。そして、ペリーには「日本は現在鎖国中」ということで帰還させた。



黒船が浦賀沖へ来航する



ペリー長官



再来航したペリーの大艦隊

翌年、再び7隻の艦隊でペリーが江戸湾に現れた。幕府は『日米和親条約』は結んだものの『通商条約』は拒絶した。

安政3年(1856)初代駐日総領事タウンゼント・ハリスが下田の玉泉寺に領事館を構えた。そして、時の大老井伊直弼^{なおすけ}は朝廷の勅許^{ちよつきよ}を得ることなく『日米修好通商条約』を締結した。そんな折、13代将軍徳川家定^{こうきよ}が薨去^{なほすけ}し、直弼の推挙で紀伊家の徳川家茂が14代将軍に就任した。幕府は弱体化した体制を立て直すため、皇室から家茂の正室を迎え公武合体策で難局を打開しようとした。時の孝明天皇は攘夷を望んでおり、妹の和宮を江戸へ降嫁させることには極めて消極的であった。

それは、和宮にはすでに有栖川宮熾仁親王^{ありすがわのみやたるひと}という許嫁^{いいなづけ}がいたからである。和宮自身も「江戸には夷狄^{いてき}や東夷^{あづまえびす}がいる怖い所なので行きたくない」と固辞した。安政7年(1860)3月3日大雪の降る朝、江戸城桜田門外において、大老井伊直弼が幕府の公武合体策に反対する、尊王攘夷思想の水戸・薩摩の浪士18人によって殺害されるという大事件が発生した。

和宮の降嫁のことは再三に亘り幕府から朝廷に奏請^{そうせい}されたため、孝明天皇もここに至り周囲の公家たちの意見を求めた。そ

訳文

下読み

碑文

請擇門下一人監督焉時大將軍將朝於 京余年在扈從中行李惚忙不暇聽其請矣事距今已數年頃翁息初太來見語及前事
門下の一人を擇びて焉に監督せしめんことを請う。時に大將軍將に京に朝せんとす。余は扈從の中に在り。行李惚忙として其の請
を聴くに暇あらず。事は今を距たること已に十數年なり。頃ごろ翁の息初太來り見みえ、語るに前事に及ぶ。
門下より一人を選んで耕読堂の指導して頂きたい」と。しかし時はまさに征夷大將軍(十四代家茂)が京へ登らんとし、余(林大学
守昇)はその随行により多忙でその願いを聞く暇がなく十數年を経た。先日、翁の息子初太が来て昔話を語った。



惜しまじな君と民とのためならば
身は武蔵野の露と消ゆとも

京都から降嫁のため江戸へ下向する皇女和宮の御輿行列図

ここで「幕府が攘夷を実行し鎖国体制に戻すならば」という条件付きで和宮降嫁を決した。固辞する和宮に、天皇は「国のためであるから」と説得し、和宮は「口惜しいけれど天皇と民のためならば、この身は武蔵野の露となる覚悟です」と心境を詠み降嫁を承諾し、文久元年（1861）10月20日、和宮一行は桂御所を出立し江戸へ向かった。

過激派などの妨害を避けるため東海道ではなく安全性が高い中山道を選んだ。行列は警護や人足を含めると3万人に上り、行列の長さはおよそ50^{キロ}、御輿の警護は12藩、沿道の警備は29藩が動員された。なお、沿道は住民の外出や商売禁止、行列を高みから見ることを禁止、寺院の鐘など鳴り物禁止、犬猫は鳴き声が聞こえない遠くへ繋ぐ、火の用心をすることなどが徹底された。道中は27日を要し11月25日に江戸へ到着し、文久2年（1862）2月11日、和宮と家茂は互いに16歳での婚姻であった。

文久3年（1863）3月4日、和宮との結婚の条件であった「攘夷を実施する」ということについて報告するため将軍家茂は上洛をした。この将軍上洛は3代将軍家光以来240年振りであった。和宮は増上寺で御札を勧請し、家茂の無事帰還を祈願しお百度を踏んでお参りしていた。



皇女和宮



徳川家茂

翌4年（1864）、京都の「八月十八日の政変」に家茂は二度目の上洛をした。慶応元年（1865）には長州が京都御所を警護する会津・薩摩藩を襲撃するという「蛤御門の変」が勃発し、不穏な状況に家茂は長州征伐のため5月16日三度目の上洛をすることになった。家茂は和宮の見送りを受けた後、海路で大坂へ向かったがこれが二人の^{はまぐりごもん}今生の別れ^{こんじょう}。

となった。慶応2年(1866)7月20日家茂は病にかかり大坂城内にて享年21で薨去した。12月25日には兄・孝明天皇が崩御し、この一年余りの間に母・夫・兄を次々と失うことになり、和宮は落飾(剃髪)し静寛院宮と号した。悲嘆に暮れる和宮のもとに家茂からの土産が届いた。「今さら唐織衣が届いても何としまししょう、それもこれも君あつてのことでしょう」と、心境を詠んでいる。



和宮の土産として用意した唐織衣

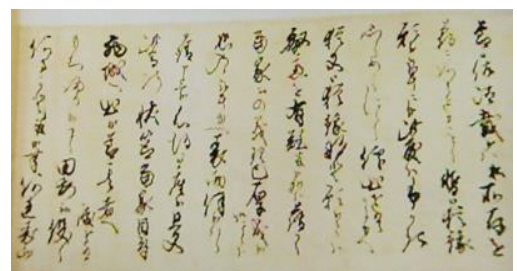
空蟬の唐織衣何かせむ
綾も錦も君ありてこそ

慶応3年(1867)1月9日に和宮の甥にあたる明治天皇が踐祚(皇位継承)した。薩摩と長州の和解がなされ官軍として江戸への進軍が始まった。慶応4年(1868)、和宮は徳川家の存続と朝敵の汚名返上の嘆願書を朝廷へ再三出した。また、江戸へ向かう官軍にも江戸への進軍中止を訴える書状も出した。皮肉にも東征大総督は元許嫁の有栖川宮熾仁親王であった。3月13日、江戸高輪の薩摩藩邸で西郷隆盛と勝海舟が面会し江戸城の無血開城が実現した。徳川家は和宮の懸命な助力で駿河国70万石が安堵された。

明治2年(1869)1月18日、和宮は京都へ向かい、父の仁孝天皇陵の参拝を済ませ京都に在住した。その後、明治天皇の奨めで明治7年(1874)東京へ戻り、皇族や天璋院・徳川家たちなど徳川一門と交流を持ったが、明治10年(1877)8月に32歳で薨去した。当初、政府は神式葬儀で行う予定であったが、和宮の「家茂の側に葬って欲しい」との遺言を尊重し、仏式葬儀で増上寺(港区)墓所、家茂の脇に並び埋葬された。

家茂と和宮の婚姻生活は激動の時代に翻弄され極めて短く不幸なものであった。それは、家茂の再三に亘る上洛で、一度目は和宮の江戸への降嫁の条件で攘夷することの返答するため、二度目は長州の尊王攘夷派が起した「八月十八日の変」後の治安のため、三度目は「蛤御門の変」を起した長州征伐のためである。

文久2年(1862)2月11日に婚礼が行われ、慶応2年(1866)7月20日に家茂が薨去するまで4年5ヵ月9日であったが、二人が実質江戸城にいられたのは3年4ヵ月10日であった。



孝明天皇宛ての和宮の返書



和宮が描いた戯画



増上寺 左は静寛院宮(和宮)、右は昭徳院殿(家茂)

「畊讀堂之碑」建碑賛同者

【右面】

上
段

久保田文造	田村幸三郎	村山忠太郎	藤生松江	阿部利七郎	當所村山容郎	田所容内	二之宮村北爪濱次	増田村福田平馬	國領村下境登喜太	二之宮村中津七平	今村長岡英齊	馬場村鯉登真道	大屋村北爪弥太郎	増田村飯嶋文穂	荒子村津久井文讓	前橋本町
-------	-------	-------	------	-------	--------	------	----------	---------	----------	----------	--------	---------	----------	---------	----------	------

下
段

當所阿部のぶ女	安堀村阿久津道太郎	前橋本町松田久太郎	馬場村長岡萬太郎	下仁田福田祐齊	瀬下高造	同傳吉造	木島芳造	荒子村上寛策	玉村宿村賢榮	尾嶋村長樂寺弟子	上之宮村須田今作	両家村武藤忠朗	越後國古志郡筒場村佐藤□範	大屋村鯉登宣	今井村小淵浅次郎	足利三宝院弟子精勇	善養寺村林源次郎	朝倉村横室杏齊	江木村早田利助	小淵重造	沼田萬八郎	今井村
---------	-----------	-----------	----------	---------	------	------	------	--------	--------	----------	----------	---------	---------------	--------	----------	-----------	----------	---------	---------	------	-------	-----

「畊讀堂之碑」建碑賛同者

【裏面】

上
段

江木村	町	田喜平
北	爪喜代太郎	
中	野福次郎	
今井村		
新	島徳次郎	
小	淵濱吉	
□□村		
新	井喜造	
駒形宿		
小	島利平	
天	川豊吉	
□州□埼郡		
僧	智状	
大胡町		
小	暮玄信	
大	川藤三郎	
同	養林寺弟子	
了	識	
□州同	豊蕘	
越前國同	明順	
東京本郷		
手	島弥一郎	
里	見利助	
埼玉郡□州王村		
篠崎周策		
山王村		
關	根和多吉	
国領村		
高	柳喜平	
當所關	根道太郎	

下
段

國領村	大	館正次郎
山王堂村	高	橋肇
小林村	井	上茂次郎
國領村	金	谷宗三郎
上之宮村	上之宮頼曹	
今村	境	野佐平
竹	内榮八	
両家村	關	根弥三郎
同	九平	
當所嶋	村勝三郎	
多胡郡日野村	山	田孫市
駒形宿	長谷川定吉	
渡邊傳		
甘樂郡馬山村	山	田忠朗
桐生祥雲寺内	豊仁	
信州欽海郡新田村	藤	森治兵衛
女屋村	女	屋文□
小嶋田村	下	田東根□
當所	久保田嶋造	
荒子村	田	中佐助

「畊讀堂之碑」建碑賛同者

【左面】

上
段

荒子村	飯嶋存二郎	□田郡安梨土村	鯉登三郎	當所	齊藤八十松	宮川仁十郎	同	藤太郎	奥州白川庄	田島雪湖	當所	久保田幸十郎	阿部倉十郎	富田村	大嶋儀八	當所	阿部桂太郎	同	新造	嶋村	荒木精一郎	堀越村	吉原己之作	二之宮村	田所安太郎	當所	村山萬平	阿部惣太郎	溜井村	松村濱吉
-----	-------	---------	------	----	-------	-------	---	-----	-------	------	----	--------	-------	-----	------	----	-------	---	----	----	-------	-----	-------	------	-------	----	------	-------	-----	------

下
段

前箱田村	深澤喜傳	前橋本町	□井竹造	野中村	原道太郎	下大類村	根岸元五郎	□野村	須藤周作	荒木金衛	小池西藏	須藤又八	嶋村	真下源作	増田村	北爪道雄	小林遼吉	大室村	中澤富衛	伊勢崎	高山仁二郎	綿貫村	五十嵐豊次郎	甘楽郡奥平村	金澤仲吉	波志江村	横堀泰次郎	同	幸吉	山王堂村	長岡孝次郎	高橋圭一郎	本村	齊藤松太郎	藤岡庄	服部太仲	大類村	高井道太郎	阿久沢浪藏
------	------	------	------	-----	------	------	-------	-----	------	------	------	------	----	------	-----	------	------	-----	------	-----	-------	-----	--------	--------	------	------	-------	---	----	------	-------	-------	----	-------	-----	------	-----	-------	-------

